

解説

辻 誠一郎¹: 日本植生史学会 30 年史Sei-ichiro Tsuji¹: A 30 years history of the Japanese Association of Historical Botany

1. はじめに

日本植生史学会は、1986年2月24日に植生史研究会として創立してから2016年で30周年を迎えた。これを記念して、2016年度の大会は創立30周年記念大会とされ、第1日目の11月19日(土)午後、「植生史研究のこれまでとこれから」と題したシンポジウムが開催された。シンポジウムはパート1「これまでの植生史研究」とパート2「多様化する植生史研究」の2部からなり、パート1では主要な研究対象であった花粉、大型植物遺体、木材それぞれの植生史研究が紹介された。パート2では若い研究者がこれからの植生史研究の可能性を中心に意見を述べ合った。記念シンポジウムに相応しい内容で、学会史を振り返るには充分であったが、シンポジウムに先立ち、学会創立から学会運営に深くかかわってきた私が、創立以来の学会活動の概要を解説した。10分という短時間であったため、活動の内容や学会誌の刊行、関連学協会との関係などについて十分に触れることができなかった。本稿は、創立前後の運営や他学協会との関係など今後は語られることがないと思われることがらを補って解説としたものである。

なお、シンポジウム前半のパート1「これまでの植生史研究」は総説として、また、後半のパート2「多様化する植生史研究」はパネルディスカッション記録として本号に掲載されており、この解説の不足を補ってくれるものと期待する。

2. 学会 30 年史

日本植生史学会と名称変更する前の植生史研究会の歴史については20年以上も前に「植生史研究会小史(1982~1994)」としてまとめておいた(辻, 1995)。その直後の1996年に日本植生史学会へ名称変更した。また、植生史研究会の前身である植生史研究談話会は学会創立に大きな役割を果たした。4年にわたって開催された談話会が植生史研究会の談話会として引き継がれ、回を重ねていったことから理解されるだろう。そこで本稿では、学会30年史に相応しくするため、辻(1995)との重複を避けながら、植生史研究談話会、植生史研究会、日本植生史学会の活動を通史としてまとめ直した。活動史の理解を促すために1982年度から2017年度までの談話会、シンポジウム、大会・シンポジウムの開催履歴を付

表にした。

最後に、本学会を取り巻く他学協会との関係に触れておきたい。今後の関係維持・強化が期待されるからである。

植生史研究談話会(1982年度~1985年度)

植生史研究談話会は、植生史研究会・日本植生史学会の前身である。日本生態学会第29回大会が大阪市立大学で開催されることになり、当時の理学部生物学科生態学系の吉良竜夫・粉川昭平両教授から、植生史研究は生態学ではマイナーであるが将来発展させるべき重要な領域であり、会合を持つようにとの示唆を受け、大会の自由集会として「植生史研究談話会」を開催することにした。生態学系古植物学研究室の助手であった辻誠一郎、その院生であった南木睦彦、花粉分析の基礎的問題に取り組んでいた神戸大学の松下まり子の3名が世話人となり、1982年4月5日、「八甲田山における植生史と問題」をテーマに植生史研究談話会を開催した(図1)。八甲田山は、ヨーロッパに学んだ花粉分析という手法を用いて日本の研究者が植生史研究を始めたスタート地点といってもよい。まずはスタート地点での研究史を振り返り、これからの研究のあり方を考えようとした。この談話会がなければ、1986年の植生史研究会

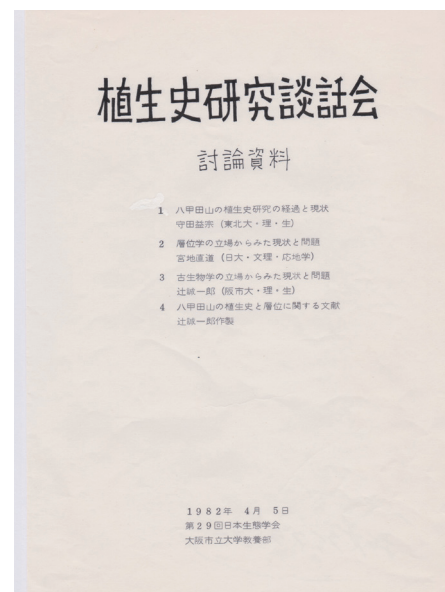


図1 学会創立のきっかけとなった第1回植生史研究談話会討論資料の表紙。

創立はもっと遅れていたか、関連学会に吸収されていたかも知れない。

次年の 1983 年は信州大学で第 2 回を、1984 年は東京農工大学で第 3 回を、1985 年は広島大学で第 4 回を、いずれも日本生態学会の自由集会として開催した。いずれも開催地に相応しいテーマを取り上げた。それまでの植生史研究をレビューし、研究者間の理解を深めることと、日本生態学会での植生史研究の周知度を高めることも大きな目的としていた。残念ながら当時の植生史研究者はさほど多くなく、また、テーマを開催地の事情に合わせたためか、参加者は定数化せず、植生史の研究者が共通にかかわる地質学、地理学、古生物学、植物学、古生態学、考古学、第四紀学における基礎的な問題にまで掘り下げて議論する場にはならなかった。それにもかかわらず、日本生態学会では植生史研究会創立後も談話会が定例化し、2001 年の第 19 回まで長く開催することとなった。これは生態学において植生史研究への関心が高かったことと、生態学会で活動する研究会メンバーが多かったからである。

植生史研究会 (1986 年度～1995 年度)

植生史研究談話会の世話人であった辻、南木、松下の 3 名に、鈴木三男、能城修一、高原光が加わって、研究者間の相互の理解を深め、基礎的問題をしっかりと議論できる組織を立ち上げることを数年にわたって検討した。その結果、上記の 6 名を発起人として 1986 年 2 月 24 日、金沢大学において植生史研究会が誕生した。これら発起人はその後の事務局の運営、1990 年に独立する編集委員会の運営に貢献し、会員数の急増、日本植生史学会への移行にも大きく貢献した。

植生史研究会の運営と活動において重要なことは次の三つである。第一は、事務局会議を設置したことである。学会活動の両翼を担う行事と学会誌の編集・発行を組織的に行うことであり、この時点で学会活動の基盤ができたといえる。第二は、会誌『植生史研究』を編集・発行したことである。この時点では当分の間、日本語による総説誌をめざした。第三は、年に 2 回、談話会とシンポジウムを開催したことである。談話会は日本生態学会の自由集会として開催し、シンポジウムは半年後の 11 月か 12 月にどの学協会とも関係せず独立で開催した。このような活動方針はその後も長く貫かれることになった。

植生史研究会創立後の最初の例会は日本生態学会の自由集会として、1986 年 4 月 2 日、京都大学において開催された。和欧両方の研究会名称の名付け親である相馬寛吉教授から提案された「スギをめぐる諸問題」をテーマとした。当日は研究会創立を祝う懇親会が京都・三条で開催された。なお、日本生態学会大会記録には、第 5 回植生史研究会と

明記されたが、第 5 回植生史研究会談話会とされるべきであった。

シンポジウムは 2 日間にわたって開催され、おおむね 5 名の話題提供を設定した。一人で 1 時間前後の話題提供をし、1 時間前後の質疑応答をもつという異例のスタイルであった。これは、話題提供に対して十分な議論をするという学会運営の基本方針を貫こうとするものであった。また、テーマは基礎的な問題を取り上げるだけでなく、広く植生史研究者が関心をもっていること、植生史と考古学が共有できることに重点をおいた。基礎的な問題とは、主として埋積・運搬・堆積・風化・変質などといったタフオノミーや、形態・分類・標本といった歴史生物地理学の基礎のことである。植生史研究談話会から基礎的問題とされていたものである。第 1 回と第 2 回はまさにタフオノミーを、第 6 回も主としてタフオノミー研究の対象としての現地性の高い埋没林をテーマとした。第 3 回の温帯性針葉樹林、第 4 回の亜高山針葉樹林、第 9 回の東アジアの植物相は、日本列島の植物相・植生の理解を進めるうえで避けて通れない植生史研究者共通の大きな課題であった。第 5 回、第 7 回、第 8 回は植生史と考古学が共有すべきテーマとして設定された。学会創立時においてもすでに植物学と考古学との深いかわりが意識されていた。1985 年～1995 年のおよそ 10 年間は、全国各地で大規模発掘調査が行われ、低地や泥炭層といった植物遺体群に富む遺跡や地層が盛んに調査され、植生史の研究者の多くがそれらに参加していたからでもある。

談話会が日本生態学会だけでなく日本第四紀学会にあわせて夜間集会・関連集会として開催されたのは、会員の多くが日本第四紀学会にも所属していたことと、日本第四紀学会との関係性が強くなってきたという理解を反映してのものであった。新第三紀から第四紀の植物相、放射性炭素年代測定は、まさに共有すべきテーマであった。第 6 回古植物学コロキウムは、一度だけ開催された植生史研究会と植物化石研究会の共催のシンポジウムである。植物化石研究会の西田誠代表の呼びかけに応じたもので、第四紀古植物学の現状について理解を深めようとするものであった。その呼びかけとは、新第三紀かそれ以前の植物化石研究者と現在の植物相・植物地理研究者が主体の植物化石研究会にとって第四紀の植物化石研究者との交流は不可欠というものであった。

事務局会議の体制が大きく変わったのは 1990 年 4 月である。特に重要なのは編集委員会が事務局会議から独立したことである。これにともない、編集委員会では論文には 200 語以内の英文要旨を付けることを決めた。これは査読付き学会誌であることを明確にするためであった。なお、会誌『植生史研究』は、1990 年までは年に 1 号の刊行であっ

たが、それ以降は年に 2 号を刊行することになった。さらに、1992 年からは年に 2 号の刊行を明確化する意味で巻号制に改めた。すなわち号制は第 9 号で終わり、第 10 号は第 1 巻第 1 号とされた。この改変とともに、論文は英文でも受け付けることとし、英文論文には和文要旨を付けることにした。このスタイルは現在まで踏襲されている。投稿論文は増加し、英文論文も投稿されるようになった。1996 年の第 4 巻第 1 号からはそれまでの B5 版から変形 A4 版に変えた。これは日本生態学会・日本植物学会の英文誌が変形 A4 版であったことによる。査読付き論文を掲載する学会誌であることをより明確にするためであった。

日本植生史学会 (1996 年度～ 2016 年度)

1996 年 11 月 23 日、植生史研究会は日本植生史学会と名称変更した。植生史研究会幹事会は同年 10 月 20 日付で会員に日本植生史学会会則と名称変更の通知を送付した。名称変更の主な理由は、会員数は 300 名を越えており広く会員の力量を結集して会を運営していく時期にきていること、日本学術会議会員の選出に係わる学術団体に登録されたこと、会誌『植生史研究』は広く内外で引用される体裁と内容をもった学会誌であることとしている。学会ではないということだけで研究業績として低く評価されるという実態があったからである。

11 月 23 日・24 日、名称変更して初めての第 11 回日本植生史学会大会が新宿区立新宿歴史博物館で開催された。実質的に学会創立 10 周年記念大会であり、23 日の懇親会は祝賀会であった。これまでの植生史研究会シンポジウムを引き継ぐかたちで 2 日間にわたりシンポジウムと総会が開かれた。考古学・文献史学を抱え込んだシンポジウムは初めてで、テーマは「中世・近世の植生史」であった。

1996 年度から 2002 年度にかけては、学会として今後どのような大会にすべきか、また、どのような談話会にすべきかを模索する移行的な段階であった。1996 年度の談話会は開催を見送った。1999 年度の談話会は独自に青森県の三内丸山遺跡・大矢沢野田遺跡で野外巡検として開催した。その前後の 2000 年度までは日本生態学会の自由集会として談話会を開催した。ようやく 2001 年度からは独自の談話会を開催するようになった。

また、大会の開催においても模索の様子がよくわかる。1998 年度の大会で重要なことは、それまでのような 2 日間にわたるシンポジウムは開催せず、一般研究発表とポスター発表を大会の主体にしたことである。1999 年度以降はシンポジウムを復活させ、第 1 日目の午後をシンポジウムに、第 2 日目を一般研究発表にあてるというスタイルができた。2002 年度の大会のシンポジウムは「考古?生態?進化?総合科学としての植生史を考える」をテーマに、植

生史研究が多分野におよぶことを確認しようとするものであった。この大会以降、一般研究発表・ポスター発表を、A「生態、古生態、環境変動」、B「人と植物の関係史」、C「分類・系統、生物地理」の三つのセクションに分けたのもその表れである。このスタイルは現在まで踏襲されている。

2003 年度からは野外巡検、野外調査法、室内実験を談話会とするようになり、2006 年度以降では談話会を年度に 2 回あるいは 3 回も開催するようになった。野外巡検は、独立して開催されたこともあるが、大会に引き続いて開催されることが多い。これに対して野外調査法や室内実験は、すべて独立して開催され、研究手法の共有だけでなく、新たな研究者の発掘・育成を目的にしていることは明らかである。図 2 は 2005 年 5 月に山口県で開催された第 23 回談話会の一コマである。1泊 2 日の巡検が定着しつつあった。

学会活動の一つとして『日本植生史学会ニュースレター』の刊行を上げることができる。2002 年 12 月 20 日付で第 1 号が刊行されて以来、大会や談話会の案内、関連学協会の行事の案内、学会ニュースを迅速に会員に送付・送信してきた。大会プログラムの最終版が事前に送付・送信されるようになったことは、活動の活発化に貢献していると評価できる。

このように 2004 年度ころまでは活動の在り方を模索したが、その後は大会・談話会も定常化し、大会への参加者も年々増加した。この間の経緯を見てみると、特筆すべきことがらいくつある。第一は、「植生史と人間活動」が必ずと言ってよいほどシンポジウムのテーマに取り上げられるようになったことである。具体的には人間が改変・創出した植生、植生・植物資源の利用、環境変動や自然災害と人間社会、といったテーマである。これらは考古学や歴史学でもテーマとして取り上げられる傾向にあり、植生史学が多分野におよぶというよりは考古学や歴史学とのボーダーを越えてきたと理解すべきであろう。一般研究発表・



図 2 第 23 回植生史学会談話会の一コマ、山口県宇生賀のスギ埋没林の巡検にて、2005 年 5 月。

ポスター発表についても、三つのセクションのうちの B「人と植物の関係史」の発表件数が多く、内容も多様化している。このことと併せて指摘できるのが、考古学の研究者が多くなったことである。若い研究者が多く、年齢層が多層的であることは特筆すべきことであろう。

3. 他学協会との関係

周辺の学協会との関係性は日本植生史学会の歴史性を理解し、これからを展望するうえで有益と思われ、今後触れられることはほとんどないと思われたので、あえて触れることにした。

すでに述べたように、植生史研究談話会、植生史研究会・日本植生史学会の談話会は 2000 年度までは日本生態学会の自由集会として開催され、日本生態学会は活動の場の一つとされた。2000 年度以降も、植生史研究を取り上げた自由集会やシンポジウムが何度も開催されており、今後も日本生態学会との関係は絶えることはないと思われる。とくに森林生態学、植物社会学、群落学との関係性は高く、現生の生態学に批判的であるよりは歩み寄り・融合の方向性も見据えていくべきであろう。日本生態学会は国際生態学会議 INTECOL の窓口である。1990 年に横浜で第 5 回 INTECOL が開催された際、植生史研究会の参加が求められたが、不参加となった経緯がある。

日本第四紀学会との関係も植生史研究談話会以来、長く続いている。日本第四紀学会は近年大きく組織改編したが、以前は会員の属する分野に植物学、古生物学、地質学、地理学、考古学、人類学などがあり、日本植生史学会の会員が多数含まれていた。改変された現在の組織においても、日本植生史学会の会員が役員を務めるなど関係性は薄れていない。日本植生史学会のテーマが日本第四紀学会で取り上げられることも珍しくない。日本第四紀学会は国際第四紀学連合 INQUA の窓口であり、日本植生史学会会員の国際会議への参加が目立つ。

同様に日本植生史学会の会員数が多いのが日本花粉学会、日本古生物学会、日本地質学会、日本考古学協会、日本文化財科学会などであろう。これらの学協会はいずれも国際学会かそれに相当する国際的組織の日本の窓口になっており、そこでも日本植生史学会の会員の活動が著しい。

1996 年 9 月、日本学術会議会員の選出に係わる学術団体に登録された日本植生史学会は、地質科学総合研究連絡委員会（いわゆる研連）に属した。この研連には日本第四紀学会、日本地質学会など 11 学会が属していた。第 17 期から第 19 期の日本学術会議会員の選出にかかわったが、その後、日本学術会議は大きく組織改編し、2003 年 4 月の選出にかかわったことを最後に、学会が直接かかわることとはなくなった。



図 3 研究会から学会への移行期の事務局記録簿とシンポジウム記録テープ。左端の 2 冊は植生史研究談話会の討論資料原稿。

最後になるが、自然史学会連合との関係について触れておきたい。連合は、第 15 期日本学術会議古生物学研究連絡委員会の提案を受け、多数の自然史分野の学会の加盟によって 1995 年 6 月に創立した。当時の古生物学研連には日本生態学会の要請で植生史研究会から辻が委員として参加した。創立時に連合に加盟しなかったのは、まだ上記の学術団体として登録されていなかったためである。日本植生史学会には考古学分野の研究者も多いが、連合には人文社会系の学会は加盟していない。自然史分野の研究教育の在り方を根本的に考えるとする連合とどのように歩調を合わせて行けるかが問われている。

4. おわりに

1994 年から 2001 年までの植生史研究会・日本植生史学会事務局の記録簿、および第 9 回植生史研究会シンポジウムから第 12 回日本植生史学会シンポジウムの録音テープが手許に残されており（図 3）、本解説もこれらにもとづいて作成した。このころは、研究会から学会へ名称変更しただけでなく、模索を重ねながらさまざまな改革が行われたことは上述したとおりである。しかし、本稿は「植生史研究会小史（1982～1994）」（辻，1995）を引き継ぐかたちにはなっておらず、諸々の理由で重要事項も省略せざるをえなかった。改革期であった 1994 年から 2001 年の学会小史を創立 40 周年までにまとめあげることを責務としたい。

引用文献

辻 誠一郎, 1995. 植生史研究会小史（1982～1994）. 植生史研究 3: 39–51.

(¹ 〒 525-0041 滋賀県草津市青地町 1148 Aoji-cho 1148, Kusatsu, Shiga 525-0041, Japan)

付表 日本植生史学会が開催した談話会、シンポジウム、大会の記録

年月日	談話会・シンポジウム・大会の名称	テーマ	会場
1982.4.5	第 1 回植生史研究談話会 - 生態自由	八甲田山における植生史と問題	大阪市立大学教養部
1983.7.25	第 2 回植生史研究談話会 - 生態自由	山岳地帯における晩氷期以降の植生史研究	信州大学教養部
1984.4.7	第 3 回植生史研究談話会 - 生態自由	関東地方における照葉樹林・暖帯落葉樹林の植生史と史的背景	東京農工大学一般教養部
1985.3.30	第 4 回植生史研究談話会 - 生態自由	最終氷期以降の瀬戸内	広島大学総合科学部
1986 年 2 月 24 日 植生史研究会設立			
1986.4.2	第 5 回植生史研究会談話会 - 生態自由	スギをめぐる諸問題	京都大学理学部
1986 年 8 月 18 日『植生史研究』創刊			
1986.8.20	日本第四紀学会 1986 年大会	『植生史研究』創刊祝賀会	つくば学園都市「ニューつくば」
1986.11.15-16	第 1 回植生史研究会シンポジウム	植物化石群集の形成過程とその性格をめぐる	大阪市立大学理学部附属植物園
1987.4.5	第 6 回植生史研究会談話会 - 生態自由	琉球列島の植生史研究に向けて	琉球大学教養部
1987.11.14-15	第 2 回植生史研究会シンポジウム	植物遺体は水域でどのように運搬・堆積するか	大阪市立大学理学部
1988.4.5	第 7 回植生史研究会談話会 - 生態自由	花粉分析による復元植生の空間的広がり	東北大学教養部
1988.11.12-13	第 3 回植生史研究会シンポジウム	温帯針葉樹林の性格と歴史	大阪市立大学理学部
1989.8.25-27	第 8 回植生史研究会談話会 - 生態自由	湿原の発達史をどのようにして読み取るか、釧路・根室・知床	釧路公立大学、巡検
1989.11.11-12	第 4 回植生史研究会シンポジウム	亜高山針葉樹林の発達史	滋賀県琵琶湖研究所
1990.8.17	第 9 回植生史研究会談話会 - 四紀夜間	第三紀から第四紀への植物相の変遷と植物群の絶滅過程	明治大学大学院棟
1990.11.17-18	第 5 回植生史研究会シンポジウム	人と植生の交渉史	千葉県立中央博物館
1991.3.28	第 6 回古植物学コロキウム - 植物化石	第四紀古植物研究の現状と展望	千葉大学理学部
1991.4.3	第 10 回植生史研究会談話会 - 生態自由	周伊勢湾地域の形成過程と東海丘陵要素の起源と進化	奈良女子大学理学部
1991.12.14-15	第 6 回植生史研究会シンポジウム	埋没した過去の植生・植物群の復元をめざして	滋賀県琵琶湖研究所
1992.9.13	第 11 回植生史研究会談話会 - 四紀関連	放射性炭素年代測定をめぐる諸問題	駒澤大学大学会館
1992.11.14-15	第 7 回植生史研究会シンポジウム	弥生時代以降の植生改変と破壊	大阪市立大学田中記念館
1993.4.30	第 12 回植生史研究会談話会 - 生態自由	後氷期の照葉樹林の分布拡大	島根大学一般教育
1993.11.6-7	第 8 回植生史研究会シンポジウム	更新世から完新世・最終氷期から後氷期・旧石器時代から縄文時代	早稲田大学本庄校舎
1994.3.31	第 13 回植生史研究会談話会 - 生態自由	九州の後期新生代の植生史	九州大学文系キャンパス
1994.11.5-6	第 9 回植生史研究会シンポジウム	東アジアの植物相の成立をめぐる	京都府立大学大学会館
1995.8.30-9.1	第 14 回植生史研究会談話会 - 生態自由	東北部における最終氷期の植生史	岩手大学、巡検
1995.11.18-19	第 10 回植生史研究会シンポジウム	“創立 10 周年記念” 標本の保存と公開	国立歴史民俗博物館
1996.3.31	第 15 回植生史研究会談話会 - 生態自由	縄文時代のクリ林をめぐる	東京都立大教養部
1996 年 11 月 23 日 日本植生史学会に名称変更			
1996.11.23-24	第 11 回日本植生史学会大会	シンポジウム：中世・近世の植生史	新宿区歴史博物館
1997.12.6-7	第 12 回日本植生史学会大会	シンポジウム：地球環境変動と東アジアの植物相の形成	兵庫県立人と自然の博物館
1998.3.27	第 16 回日本植生史学会談話会 - 生態自由	Yonger Dryas の頃、日本ではブナが増えた	京都大学人間学部
1998.12.5-6	第 13 回日本植生史学会大会	招待講演（竹内貞子会員）	東北大学理学部附属植物園
1999.5.15-16	第 17 回日本植生史学会談話会	青森市内丸山遺跡、大矢沢野田遺跡	巡検
1999.12.4-5	第 14 回日本植生史学会大会	シンポジウム：最終氷期の垂寒帯性針葉樹の拡大と縮小	千葉大学園芸学部
2000.3.24	第 18 回日本植生史学会談話会 - 生態自由	森林群落における優占種の出現と交代は何を意味するのか？	広島大学
2000.11.25-26	第 15 回日本植生史学会大会	シンポジウム：縄文時代以降の人間活動と栽培植物	滋賀県琵琶湖博物館
2001.3.30	第 19 回日本植生史学会談話会 - 生態自由	有明海をめぐる古生態	熊本県立大学
2001.10.20-21	第 16 回日本植生史学会大会	シンポジウム：冷温帯林の背腹性と中間温帯論	北海道教育大学函館校
2002.3.9	第 20 回日本植生史学会談話会	日本の第四紀植物学と考古植物学の発展—粉川昭平先生の足跡と貢献	大阪市立大学学術情報総合センター
2002.11.16-17	第 17 回日本植生史学会大会	シンポジウム：考古？生態？進化？総合科学としての植生史を考える	福井県立恐竜博物館

付表 (続き)

年月日	談話会・シンポジウム・大会の名称	テーマ	会場
2003.5.31-6.1	第 21 回日本植生史学会談話会	照葉樹林の植生観察	巡検；宮崎県綾町
2003.11.29-30	第 18 回日本植生史学会大会	シンポジウム：景観復元と時・空間スケール	岡山理科大学
2004.3.20-21	第 22 回日本植生史学会談話会	植生史解明のための野外調査法その 1：ボーリング実習	千葉県東部，千葉県立中央博物館
2004.11.27-28	第 19 回日本植生史学会大会	シンポジウム：先史時代におけるウルシの利用	中央大学理工学部
2005.5.14-15	第 23 回日本植生史学会談話会	山口県東部における後期更新世（最終氷期）以降の植生史とその情報をもたらしした堆積物の堆積場をつくった火山活動，そしてスギ埋没林	巡検
2005.12.10-11	第 20 回日本植生史学会大会	シンポジウム：縄文から弥生にかけての近畿の環境史—考古と古植生のデータで「弥生化」を考える	京都府立大学
2006.6.10-11	第 24 回日本植生史学会談話会	石斧伐採実験のあとを訪ねる	東北大学川渡共同セミナーセンター
2006.9.9-10	第 25 回日本植生史学会談話会	植生史解明のための室内実験法 1：微粒炭の基礎と方法	総合地球環境学研究所
2006.11.25-26	第 21 回日本植生史学会大会	シンポジウム：人類時代の植生史研究と考古植物学—旧石器から江戸へ—	東京大学本郷キャンパス
2007.5.12-13	第 26 回日本植生史学会談話会	岐阜県大垣市上石津の里山と前期更新統東海層群多良累層の植物化石	巡検
2007.11.17-18	第 22 回日本植生史学会大会	シンポジウム：100 万年，10 万年，1 万年スケールで見た大阪湾周辺の植生と環境の移り変わり	大阪市立自然史博物館
2008.8.2-3	第 27 回日本植生史学会談話会	漆にかぶれよう	岡山理科大学森山学舎
2008.8.29	第 28 回日本植生史学会談話会	植生史解明のための室内実験法 2：花粉分析の効率的な分離と観察・同定	岡山理科大学
2008.11.15-16	第 23 回日本植生史学会大会	シンポジウム：環境変動と人間活動による植生の形成を読み解く	飯坂，パルセいいざか
2009.7.18	第 29 回日本植生史学会談話会	植生史解明のための室内実験法 3：位相差顕微鏡を用いた花粉の観察・同定	岡山理科大学
2009.11.6-8	第 24 回日本植生史学会大会	シンポジウム：植生と人間の共生—植物は栽培化（ヒトの関与）でどう変化したか—	熊本大学工学部百周年記念館
2009.11.8-9	第 30 回日本植生史学会談話会	阿蘇の草原の歴史をさぐる	巡検
2010.7.17	第 31 回日本植生史学会談話会	植生史解明のための室内実験法 4：初心者のための遺跡出土木材の切片作製と同定法	中央大学理工学部
2010.11.27-28	第 25 回日本植生史学会大会	シンポジウム：東海地方における里山林の成立とその利用	名古屋大学野依記念学術交流会館
2011.7.16-17	第 32 回日本植生史学会談話会	植生史解明のための室内実験法 5：初心者のための種実遺体の分析・同定	中央大学理工学部
2011.11.5-6	第 26 回日本植生史学会大会	シンポジウム：ヒバ，五千年の歴史と文化	弘前大学創立 50 周年記念会館
2011.11.6-7	第 33 回日本植生史学会談話会	下北半島猿ヶ森砂丘のヒバ埋没林	巡検
2012.4.28-30	第 34 回日本植生史学会談話会	韓国東南部の植生と植物利用	巡検：韓国慶州・南山
2012.11.23-24	第 27 回日本植生史学会大会	シンポジウム：縄文人の森—越後平野の原風景	長岡；アオーレ長岡
2012.11.24-25	第 35 回日本植生史学会談話会	佐渡の天然スギ	巡検
2013.11.29-12.1	第 28 回日本植生史学会大会	シンポジウム：最終氷期最寒冷期の西南日本の森を考える—植物化石と DNA からさぐる古植生研究の最前線	高知市文化プラザかるぼーと
2013.12.2	第 36 回日本植生史学会談話会	室戸岬の植生と植物	巡検
2014.6.14	第 37 回日本植生史学会談話会	植生史解明のための室内実験法 6：土器に含まれるプラント・オパールの意味とその展開	中央大学理工学部
2014.11.21-23	第 29 回日本植生史学会大会	シンポジウム：火山とともに生きる—南九州の火山活動と植生史・人類史—	鹿児島大学郡元キャンパス
2014.11.24	第 38 回日本植生史学会談話会	桜島植生復元巡検	巡検
2015.6.13-14	第 39 回日本植生史学会談話会	大型植物化石研究のための植物形態学実習	中央大学理工学部
2015.11.6-8	第 30 回日本植生史学会大会	シンポジウム：植生史が語る北海道の文化—縄文からアイヌへ—	北海道博物館
2015.11.9	第 40 回日本植生史学会談話会	北海道の植生と埋蔵文化財	巡検
2016.5.28-29	第 41 回日本植生史学会談話会	西中国山地の温帯林と三瓶火山に伴う埋没林	巡検
2016.11.18-20	第 31 回日本植生史学会大会	シンポジウム：植生史研究のこれまでとこれから	専修大学
2017.5.19-21	第 42 回日本植生史学会談話会	北海道・道東の植生巡検	巡検
2017.12.1-3	第 32 回日本植生史学会大会	シンポジウム：環境と稲作と中国文明—総合稲作文明学へのアプローチ	宮崎県県電ホール
2017.12.4	第 43 回日本植生史学会談話会	綾ユネスコエコパーク巡検	巡検

生態自由：日本生態学会自由集会
 四紀夜間，関連：日本第四紀学会夜間集会，関連集会
 植物化石：植物化石研究会と共催